

---

&quot;携帯執筆小説&quot; **満員電車の天才**

結城陸空

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

” 携帯執筆小説 ” 満員電車の人

### 【Nコード】

N 6 6 4 8 M

### 【作者名】

結城陸空

### 【あらすじ】

携帯電話で執筆してみた携帯小説です。連載形式ですが、1話1話がすごく短いのが特徴です。また毎日の更新を目標としています。話自体は長くないです。” あらすじ ” 満員電車の中、僕は痴漢に間違われた。

「この人、痴漢です」

今日は、梅雨も明け晴れ晴れとした夏空が広がっている。

だが、朝の満員電車の中は、冬も夏も関係ない。いつでも人が、ぎゅうぎゅう詰めで、駅員が必死に押さえ込んでいるのはよく見る光景だ。

そして、そんな満員電車に乗っていると一年に数回は、ちょっとした事件を目撃する。それは”痴漢”だ。冤罪も、もちろんあるだろうが、満員電車を利用して女性の身体に触ろうとする輩がいるのも確かだ。

ただ、今日はいつもと違いその痴漢の濡れ衣を着せられたのが、  
”僕”だと言うことである。

「やってません」

「最初はみんなそう言うんだ。被害者の女性が証言してるんだ。間違いない」

痴漢と間違われた僕は、駅員室に連れて行かれ僕の話をついて聞くこともなく、警察を呼ばれた。こういったことはよくあるのだから駅員の対応は、女性が満足するほどスマートで、僕が嫌悪感を感ずるほど手際が良かった。

「ここでラチが開かなければ署まで来てもらうしかないな」

もし、ここで早く逃れたいが為に、嘘の証言なんかすると、自分に不利になる。逆にここで無実を証明できれば冤罪で済む。

だが、やっていないという確かな証拠がないのもまた事実。ないものを証明するのは、あるもの証明するより遥かに難しいのだ。

「あの、すいません」 駅員室に入ってきたのはどこぞのおばちゃんだった。

「私見てたんですけど、彼は違うと思います。本当の犯人はこっちです」

おばちゃんが、指を指した先には、中年の男がいた。どうやら痴漢犯を捕まえてきたらしい。なんともパワフルなおばちゃんである。「ということは、彼は犯人じゃないということか……」

「だから、最初から言ってるじゃないですか」

真・犯人も捕まり無事、事件は解決した。

「いやー、悪かった。こういうことはよくあるんでつい疑ってしまいた。お詫びします」

疑いも晴れ、警察も駅員もころつと態度が変わった。

しかし……。

「いいえ、許せんせん」

事件は解決しても、僕に対する対応については解決していない。  
これからが本当の戦いになるだろう。

「勘違いは誰にでもあります。だから女性の方は許しましょう」

痴漢を働くのは最低な人間だが、何の証拠も確証もなく人を犯人だと決めつける奴も悪い。

「しかし、あなた達2人は別だ。最初から僕の話をもったく聞くことをせず、犯人扱い。そんなことをしたあなた達が許される思ってるんですか？」

僕が言う2人とは駅員と警察官だ。この二人は、決して許さない。

「あなた達2人は、名誉毀損で訴えます」

「ちよつと待ってくれ。頼む勘弁してくれ」

駅員が言う。

「人の話は聞かなかったのに、自分の話は聞けと？ 却下です」

僕はカバンの中からペンとメモ用紙を取り出した。

「ここにお二方の住所と氏名と連絡先を……。後日弁護士を通して、告訴状を送付してもらいます」

「その話、ちょっと待て」

僕が、警察官達に住所等を書かせていると1人の男が声をかけてきた。それはどこにでもいそうな高校生だった。

「痴漢なんて、馬鹿なことをするなんてどこの馬鹿だろうと、野次馬的に見学していたら、違和感を感じた」

「違和感？」

「あんた、何故痴漢だと疑われる位置にいたんだ？ 俺も毎日、同じ時間帯の電車に乗ってるから分かるけど、あんた3ヶ月前にも、痴漢の容疑をかけられて、結局勘違いってことで解放されてるよね？」

突然、声をかけてきた男の発言により場の空気は一転した。

”なんだコイツは？”。それが、僕が最初に思ったことだった。  
「僕は昔からそういうトラブルに巻き込まれやすい性質<sup>たち</sup>なんだ。ほんとに運が悪いですよ」

「へえ、そうなんですか？」

少年は、わざとらしく話に納得したように見せているが、実のところ何かを探っているようにも見えた。

「ところで、さっきの痴漢犯は刑が確定するまで、どうなるんですか？」

「拘留所で過ごしてもらうことになる。もちろん保釈もあり得るが……」

「それは、どの位？」「ケースバイケースだが、通常は現場検証の後、裁判になるから大体1ヶ月ほどだな」

警察官の言葉に、少年は黙り込み何かを考えているようだ。

「なら……あなた達が訴えられて、彼が慰謝料をもらうほうが遥かに早いですね」



「な……何を言い出すんだ？」

僕は、突然現れた少年に嫌悪感を抱く。いきなり現れて変なことを言い出すからだ。

「もし、仮に、例えばですけど、痴漢犯と痴漢された女性とあなたがグルだったら……痴漢犯に痴漢をさせ、痴漢された女性はあなたを犯人とする。ところが別の痴漢犯が犯人だと判明し、あなたは解放。しかし、疑われたあなたは、警察達を相手取り名誉毀損で慰謝料を請求する。その後、痴漢犯は女性により無罪方面。しかし、あなたは彼らから慰謝料を受け取った後。その後は、慰謝料を三人で山分けし、全ては完了する」

この少年の言い方は、まるで僕が黒幕だと言っているようにも聞こえた。

「な、なにを……！」

「だから……、もし、仮に、例えば……と言ったでしょう？　なんでそんなに向きになって否定するんですか？　まさかあなた本当に？」

人をまったく信用しない高校生だと思った。突然現れて、自分の好き勝手に推理を披露する。まるで自分はシャーロック・ホームズでもあるかのように。

さすがの僕もここまで疑われて、黙ってはいられない。

「キミがなぜ僕をそこまで疑うのか分からないが、そこまで言うなら僕も言わせてもらう。僕は、会社員だ。はつきり言ってもう仕事は始まっている時間だ。わざわざ会社に遅刻してまで、そんな回りにくいことをする意味も、メリットもない。キミが自分の推理力を披露したい気持ちも分かるが、はつきり言っただけには時間がない。仕事が遅れてるんだ。キミら高校生とは違うんだ」

それを僕は少し声を荒げて言う。さすがの生意気な高校生もコレには黙り込む。

そう願っていた。しかし、彼は黙り込むことはなかった。そしてこう言い放つ。

「墓穴を掘りましたね」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6648m/>

---

"携帯執筆小説" 満員電車の天才

2010年10月8日14時10分発行